

## [報告]宝永地震(1707年)と津波による大坂市中での死者数

長尾武<sup>1</sup>

The Death Toll from the 1707 Hōei Earthquake and Tsunami in Osaka City

Takeshi Nagao

Tennojichominami3-8-9, Abenoku, Osaka, 545-0002, Japan

### §1. はじめに

本研究は宝永地震による大坂市中での死者数について考察する。先行研究では、『大阪市史』は男女541人が溺死したとしている<sup>※1</sup>[大阪市参事会(1913. a)]. 宇佐美・他(2013)は死者534人としている<sup>※2</sup>。これらは、大坂三郷人別帳に記載されている者についての死者数と考えられる。矢田(2013)は尾張藩士堀貞儀の『朝林』を信頼できる史料とし、地震による圧死者5,351人、溺死人16,371人、合わせて約21,722人を正確な死者数とした。この死者数は、大坂三郷人別帳に記載されていない者を含めた死者数と考えられる。

宝永地震の死者数については、多くの史料が様々な被害数値を示しており、どれが正確な数値なのかを知るために、長尾(2014)は宝永地震による大坂市中の被害数についての基礎資料を作成した。原(2014)は『大阪編年史』7巻に所収の『御触及口達』について、安政元年の作成で、問題があったとした<sup>※3</sup>。その後、長尾(2015)は、諸史料の書誌を詳しく調べ、被害数の一覧表を作成して、大坂三郷人別帳で確認された死者数540人程度を正確な被害数とした。帳外の者<sup>※4</sup>を含む死者数については、多くの史料が圧死者(地震による)3,600人程度、津波による溺死者12,000人程度としているが、これらの死者数については問題があり、今後の検討課題とした。本研究は宝永地震による大坂市中での死者数について、課題となっていた問題点について検討し、新しい知見を述べる。

※1. 『大阪市史』は被害数の出典を記載していないが、『撰陽奇観』に類似している。『大阪市史』の被害数を家屋の被害で見ると、1774軒であるが、『撰陽奇

観』では、潰家993軒と曲家781軒で、2つの被害数の和は1,774軒となる。他に落橋数45、船舶被害についても同数である。異なる点は、死者の死因の違いで、『大阪市史』は541人すべてを溺死者としているが、『撰陽奇観』では死者541人のうち9人溺死である。

※2. 死者数の出典を記載していないが、『御触及口達』、『名なし草』も同数の534人である。

※3. 原直史は、『大阪編年史』7巻に所収の被害数の出典表記が「御触及口達安政元年」とあり、安政の地震時に作成された記録であると指摘した。原が指摘するように、宝永時の原本の写しとは言えないだろう。しかしながら、『御触及口達』の被害数値の中でも、崩家1,061軒と死者数534人については、町方によって調査されたものであり、関係文書が町政に携わった人々によって保存されていたと考えられる。津波溺死者数も他史料と比べて決して大きくない。ねつ造された被害数とは考えられない。

※4. ここでいう帳外の者とは、大坂三郷人別帳に記載の無い者のことである。商業の中心であった大坂には近隣の村々をはじめ全国各地から絶えず人々が流入していた。その他、大坂市中の近隣4か所の村々に居住する非人は市中各町の垣外番として存在した。また、市中には仕事に従事するが定住できず、木賃宿に居住する無宿人、物乞いをして放浪する野非人などが存在した[新修大阪市史編纂委員会(1989)]。

### §2. 宝永地震による大坂市中での死者数

大坂市中での死者数はどのようにして調べられたのであろうか。地震直後に、惣年寄が町年寄を招集して、家屋の被害や怪我人等を調査して報告するよ

<sup>1</sup>〒545-0002大阪市阿倍野区天王寺町南3-8-9  
電子メール:nagaotakeshi345@hotmail.com

うに命じた<sup>\*</sup>。町年寄や、町内近隣の住民が被害状況を調べ、死者については人別帳で照合し、記録して、惣年寄に報告し、さらに奉行所に伝えられた。宝永地震の際に大規模な火災の発生も無く、圧死者の遺体損傷は火災や津波に比べて少なく、識別は困難では無かったであろう。それゆえ、人別帳に記載されている死者数(溺死者も含まれているかも知れない)は正確な数値と考えられる。これに対して、帳外の者を含む圧死者数や津波による溺死者数については、推測が入っている可能性がある。

※宝永地震後の被害調査がどのように始められたかを記録した史料は残っていないが、安政東南海地震の被害調査は、地震の直後、北組の惣年寄永瀬七郎右衛門が惣会所に町年寄を招集して、崩家や怪我人等を調査し、届け出るように命じた[大阪市参事会(1913. b)]。宝永地震でもこのようにして行われたと考えられる。

## 2. 1大坂三郷人別帳で確認された死者数

次に採りあげる11史料は、三郷人別帳に登録されている者についての死者数を示している(帳外の者を含まない)。1つの史料の中に、複数の被害数が記載されているものについては、①、②を付けて区別した。三郷組別死者数や死因別死者数が記載されているものについて、()に数値を示した。被害数を検討し、実際の死者数がどれくらいであったかを推定する。

### ・11史料に記された死者数

260人:『楽只堂年録』[東京大学地震研究所編(1983)]

264人:『鸚鵡籠中記①』[名古屋市教育委員会編(1968)]

(北128・南84・天満53) ※正しい合計は265人である

266人:『塩尻①』[日本随筆大成編輯部(1977)]

(北128・南85・天満53)

以上の3史料は地震直後の十月五・六日頃調査された死者数である。

534人:『御触及口達』[本庄・他監修(1969)], 『名なし草①』[本庄・他監修(1969)]

541人:『撰陽奇観』[東京大学地震研究所編(1983)]

(内、9人は溺死・2人は他国者)

『地震海溢記①』[東京大学地震研究所編(1983)]

542人:『宝永地震記』[文部省震災予防評議会編(1941)]

(北286・南145・天満111)

『地震海溢記②』[東京大学地震研究所編(1983)]

(北286・南145・天満111)

(地震128, 津波414) 組別の死者数も記録。

564人:『浪速之震事』[本庄・他監修(1969)]

(北308・南145・天満111)

734人:『大阪諸国大地震大津浪並出火』[東京大学地震研究所編(1983)] (北278・南345・天満111)

### ・考察 大坂三郷人別帳で確認された死者数ほど れくらいか?

柳沢吉保の公用日記である『楽只堂年録』に記載された被害数は宝永地震の直後の十月五日付、大坂町奉行からの報告と考えられる。死者数は凡そ260人程である。『塩尻①』、『鸚鵡籠中記①』では若干の違いがあるが、近似している。以上の3史料は地震発生直後に行われた調査結果で、その後、死者数は増加したと考えられる。

『御触及口達』、『名なし草①』、『撰陽奇観』、『地震海溢記①』、『宝永地震記』、『浪速之震事』、『大阪諸国大地震大津浪並出火』の7史料は宝暦・文化・安政期など、宝永地震から50年以上経過して作成されたと思われる史料である。『大阪諸国大地震大津浪並出火』では南組の死者数が345人で、組別死者数を記載する他の3史料は145人である。南組145人を345人と誤記したと思われる[長尾(2015)]。以上のように考えるなら、三郷人別帳に記載の死者数は534～564人の範囲に絞りこまれる。約550人とする。

### ・死者数に溺死者は含まれるか?

人別帳で確認された死者数を記録する11史料の中、2史料が溺死者数を記録している。『撰陽奇観』は、死者541人中、9名が溺死者である。津波の死者は船に乗っていた人々と考えられる。

『地震海溢記②』は、死者数542人のうち、地震128、津波414と記載している。『地震海溢記②』の被害数は家屋被害では組別数値に誤りがあるが、『塩尻①』などと近似し、地震直後の十月五～六日の調査記録を使用したと考えられる。しかし、死者数542人は『撰陽奇観』など、地震からかなり経過した史料の死者数に近い[長尾(2015)]。すなわち、複数の出典を編集しているのである。津波による溺死者の確認は困難であったはずである。多くの溺死者の身元を確認したという出典が存在するなら、他の史料でも似たような溺死者数を記載したのものがあるはずである。しかしながら、皆無である。また、地震による死者数128人は、他の史料で、帳外の者を含めた圧死者数3,000人以上(これが正確かどうか不明だが)と比べるとあまりにも少ない。『(E-26)地震海溢記②』は被害数を詳細に記述しているが、死者数の内訳については、編者の作為が働いた可能性がある。人別帳で確

認められた死者数を記録する他の9史料でも溺死者数が含まれると考えているが、『撰陽奇観』で示しているように、確認された数は少ないと考えられる。人別帳に記載の者でありながら、身元確認できず、見落とされてしまった溺死者が多かったと推定される。

#### ・大坂三郷人別帳で確認された死者数のまとめ

以上述べたことを総括すると、人別帳で確かめられた死者数は約550人となる。地震による死者数は約550人の範囲内に収まるが、三郷人別帳に記載の者でありながら、確認できなかった溺死者数を合わせれば、550人よりはるかに大きくなると考えられる。長尾(2015)は三郷人別帳で確認された死者数540人程度を正確な被害数としたが、津波による溺死者数を加えると、約550人をはるかに超えると訂正しなければならない。

## 2. 地震による圧死者数

地震による圧死者数を記載しているのは、次の12史料である。

### ・12史料に記された圧死者数

- 3,020人：『徳川実紀』[本庄・他監修(1969)]
- 3,620人：『月堂見聞集』[森・他監修(1981)], 『江府京駿雑誌』[東京大学地震研究所編(1983)], 『塩尻②』, [前掲]『宝永四年亥十月四日大阪大地震之事』[東京大学地震研究所編(1983)], 『諸国大地震大津浪一代記』[東京大学地震研究所編(1983)]
- 3,630人：『鸚鵡籠中記②』[前掲]
- 5,351人：『朝林①』[朝林研究会編(2010)]
- 6,000人：『今昔地震津浪説』[東京大学地震研究所編(1983)]
- 7,000人：『名なし草②』[前掲], 『宝永度大坂大地震之記』[本庄・他監修(1969)]
- 10,061人：『大地震之由来』[東京大学地震研究所編(1983)]

### ・考察 帳外の者を含む圧死者数について

地震の際に大規模な火災の発生も無く、圧死者の遺体損傷は津波による溺死者に比べて少なく、識別は困難では無かったであろう。それゆえ、見落としなどは少なかったと思われる。地震による死者数については、三郷人別帳で確認された死者数は約550人(溺死者も含まれているかも知れない)の範囲に収まると考えられる。三郷人別帳に記載の無い者を含めた圧死者数は3,600人程度とする史料が多い。人別帳に記載されている死者数約550人(すべてを地震による死者と仮定)を差し引いた3,000人以上が、帳外の圧死者ということになる。人別帳に記載されてい

ない人々が地震で死亡した比率と、人別帳に記載されている人々のそれとがあまり変わらないとするなら、大坂市中の人口の5～6倍の人々が入り込んでいたことになる。大坂三郷の人口は元禄十六年(1703)に351,708人であった[新修大阪市史編纂委員会(1990)]が、200万人近い人々が大坂市中に入り込んでいたことになる。全国の物資の集散地として繁栄していた大坂であるが、これほどの人口の流入が起こっていたのであろうか。そのような人口の流入が無かったとするなら、この圧死者数は過大な推定数ということになる。

## 2. 3帳外の者を含む溺死者数

大坂市中での津波は、家押し流す程の高さでは無く、死者の多くは船に乗っていた人々であった[長尾(2011)]。溺死人の捜査や身元確認は、堀川で破船した多数の川船の片付け、入り込んだ大船の引き下ろし作業に伴って行われた。遺体は津波によって運ばれ、人別帳に記載の者であっても、住所とは離れた場所で引き揚げられ、また、損傷が激しく、身元確認は困難であった。さらに、津波の引き波によって、大阪湾の沖合まで運ばれてしまった遺体もあると考えられる。溺死者数の正確な把握は困難であった。そのため、諸史料の溺死者数は推定した概数で示されている。

### ・16史料に記された帳外の者を含む溺死者数

- 7,000人：『浪速之震事』[前掲]
- 10,000人：『御触及口達』[前掲], 『名なし草①』[前掲]
- 12,000人：『月堂見聞集』[前掲]など7史料
- 12,030人：『地震海溢考十月四日・・・』[東京大学地震研究所編(1983)]
- 12,100人：『鸚鵡籠中記』[前掲]
- 16,371人：『朝林①』[前掲]
- 17,000人：『大阪諸国大地震大津浪並出火』[前掲] (水亡人7,000人、洪水にて10,000人)
- 20,600人：『大地震之由来』[前掲] (橋の上にて死人)
- 25,000人：『基熙公記』[文部省震災予防評議会編(1941)] (大船中で死人)

### ・考察 史料の溺死者数について

溺死者数は把握しにくい。しかし、『朝林①』は1桁まで示している。他史料は概数である。『大阪諸国大地震大津浪並出火』は水亡人7,000人に加えて、「洪水にて10,000人」としているが、大坂市中ではこのような洪水は起こっていない。『大地震之由来』の溺死者数20,600は「橋の上にて死人」とあるが、実際には船

に乗っていた人々の溺死が多かった。20,600人は誇張された数値と考えられる。『基熙公記』の溺死者25,000人は「大船中で死人」とあるが、小船が大船に押しつぶされたのであって、大船中の死者は少なかったと考えている。事実とは異なる誇張された数値と考えられる。史料中の信頼できない記述を指摘した。以上から、諸史料の溺死者数の中、特に問題のない数値は7,000～12,100人と言える。しかし、この溺死者数の範囲も推定数であり、諸史料は過大に推定する傾向があり、7,000人を下回る可能性も否定できない。

### §3. おわりに

大坂三郷人別帳に記載の死者は約550人とした。津波による溺死者は身元の確認が困難で、上記の死者数の大部分は地震による死者であったと考えられる。溺死者数を合わせると、550人をはるかに上回ると推定している。

諸史料に記載の圧死者数は、3,600人程度が最も多い。三郷人別帳に記載者についての死者数約550人(地震による死者と仮定)を差し引いた3,000人以上が帳外の圧死者ということになる。人別帳に記載されている人々が地震で死亡した比率と人別帳に記載されていない人々のそれとがあまり違わないと考えるなら、大坂市中の人口の5～6倍の人々が入り込んでいたことになる。そのような膨大な人口の流入が無かったとするなら、この圧死者数は過大な推定数ということになる。

溺死者数の中、特に大きな誇張が無いと思われる数値は7,000～12,100人と言える。但し、この溺死者数の範囲も推定である。7,000人を下回る可能性も否定できない。

大坂三郷の人口は元禄十六年(1703)に351,708人であったが、宝永六年(1709)に381,626人に増加している[新修大阪市史編纂委員会(1990)]。被害数を考える際には、このような人口動態にも注意する必要がある。

### 謝辞

本稿の作成について、編集担当の白石睦弥氏から有益な助言をいただきました。

対象地震: 1707年宝永地震

### 文献

- 朝林研究会編, 2010, 共同研究報告書12, 朝林後編, 名古屋学芸大学短期大学部地域文化研究センター, 284-287.
- 原直史, 2014, 宝永地震における大坂市中の被害情報について, 災害復興と資料, NO. 2, 1-11.
- 本庄栄治郎, 黒羽兵次郎監修, 1969, 大阪編年史, 7, 大阪市立中央図書館市史編集室, 480pp
- 文部省震災予防評議会編, 1941, 増訂大日本地震史料, 2, 震災予防協会, 754pp.
- 森銚三・北川博邦監修, 1981, 続日本随筆大成, 別巻, 近世風俗見聞集2, 月堂見聞集, 吉川弘文館, 1981, 333pp.
- 長尾武, 2011, 宝永地震(1707年)による大坂市中での津波遡上高, 歴史地震, 26, 15-20.
- 長尾武, 2014, [資料] 宝永地震(1707年)による大坂市中での被害数, 歴史地震, 29, 163 - 171.
- 長尾武, 2015, 宝永地震(1707年)による大坂市中での被害数, 立命館大学歴史都市防災論文集, Vol. 9, 229-236.
- 名古屋市教育委員会編, 1968, 名古屋叢書, 続編11巻, 鸚鵡籠中記, 名古屋市教育委員会, 657pp.
- 日本随筆大成編集部, 1977, 日本随筆大成, 第3期13, 塩尻, 吉川弘文館, 528pp.
- 大阪市参事会, 1913a, 大阪市史, 1, 大阪役所(復刻版, 1978, 清文堂出版, 1179pp.)
- 大阪市参事会, 1913b, 大阪市史, 4下, 大阪役所(復刻版, 1979, 清文堂出版, 2639pp.)
- 新修大阪市史編纂委員会, 1989, 新修大阪市史, 3, 大阪市, 1092pp.
- 新修大阪市史編纂委員会, 1990, 新修大阪市史, 4, 大阪市, 1058pp.
- 東京大学地震研究所, 1983, 新収日本地震史料, 3・別巻, 日本電気協会, 590pp.
- 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧599-2012, 東京大学出版会, 694pp.
- 矢田俊文, 2013, 1707年宝永地震と大坂の被害数.